大牟田市久保田町一丁目の蓮心寺で、しめやかに営まれた死没囚人労仂者法要。参加者は、苛酷な強制労仂の昔をしのび、心から冥福を祈つた。

死没囚人労働者法要、しめやかに

苛酷な強制労働しのぶ

三井「御出役を懇願奉る」

大牟田囚人墓地保存会（浦川守代表）が、毎年営み続けている〝死没囚人労働者法要〟（今年十三回め）は、例年通り八月十日、大牟田市久保田町一丁目の蓮心寺で営まれた。約四十人の参詣者は、しめやかな読教のなか心から故人たちの冥福を祈り、二度とこのような苛酷な強制労働などが行われないためにも、現在の民主主義を守る努力をすることを誓い合った。

囚人労働開始

囚人といっても、大牟田のそれはただの囚人でなく、はじめから三池炭鉱に労働力として投入された、文字通りの囚人労働者を意味する。事実、大牟田に三池集治監が創設されたとき、工部省（現在の通産省に当たる）自身の報告に「三池集治監は、採炭の一途にこれを使役す」、とある。

三池炭鉱の囚人労働は、官営時代の明治六年（一八七三）から始まって、明治二十二年に三井がかわって経営することになったときも「不可欠な労働力」としてそのまま継続され、昭和五年十二月の三池刑務所（三池集治監から三池監獄を経て、この名称に）の廃監にいたるまで六十年近く続いた。

投入されてきたのは三瀦（福岡県に合併）、福岡、熊本、長崎、佐賀などの順に。そして一時期（明治二十一年当時）など、三池炭鉱の労働者の約七〇％を囚人労働者が占めたほどだ。（労働者総数が三千百三人で、囚人労働者二千百四十四人）

全国各地でも

囚人労働は、何も三池炭鉱にかぎったことではなく、北海道（NHKのテレビドラマ〝獅子の時代〟を参考に）をはじめ、わが国の原始的資本蓄積期の主要な労働力として、全国各地で強制使役されている。九州に例をとれば、三菱高島ほか宇美炭鉱など筑豊の諸炭鉱にも投入されている。現に、明治維新政府の高官だった清浦奎吾や金子堅太郎（いずれも後で幕閣の席に）などいっている――「苛酷な労働に一般人を使うと、死んだ場合、妻子があったり親がいたりで、何かとこまる。それに比べると、囚徒の場合泣く者もいない。だから、重労働の仕事には囚徒どもを大いに使うべし。それは国家経綸の道でもあり、一挙両得である」。

便利な労働力

そのことは三井が三池炭鉱を手に入れた後も変りはなく、三池炭鉱の初代事務長だった団琢磨も、政府や県に対して、囚人労働の継続を要請した手紙のなかで、まるですがるように述べている――「以後も変りなく、囚徒の御出役を懇願奉り候」。

唯同然で、しかも集団的に、文句をいわせることなく、存分に使える、きわめて便利な囚人労働だったから、資本にとって魅力的な存在でないはずはなく、三井は、いわば囚人労働搾取のうえに大もうけを積みあげていったはずだ。

思えば、囚人労働は三池炭鉱発展の人柱であり、大牟田市の歴史の礎（いしずえ）である。

水害見舞いとどく

名古屋から赤川さんへ

さきほど、当地を襲った豪雨水害に被災した組合員の一人＝赤川富幸さん（大牟田市新勝立町五丁目六番地。朝日ケ丘）のもとへ、名古屋市北区上飯田西町一の一、G三〇五に住む中村幸人さん（もと三池労組員）から、心暖まる見舞いが寄せられてきた。

「かってお世話になった万分の一のお礼に……」とのことだが、中村さんは本紙を通じて赤川さんの被災を知ったもので、赤川さんは心から友情に感謝している。

竹内さんみごと優勝

大牟田のテニス大会

大牟田ローンテニスクラブ主催のテニス大会は、八月九日、小浜コートで決勝戦が行なわれ、竹内隆雄さん（十八分会、三川内電工）は、B級シングルスの部で優勝、みごと中島杯を獲得しました。

この大会は、七月中旬から毎週日曜日毎に予選を行ない、八月九日は準決勝と決勝戦が行なわれたもので、B級には七十九人が出場。決勝戦では若い高校生と対戦、ふだんの練習の成果を実らせたものです。

この結果、竹内さんはA級（三十数人）へ進みました。今後の精進を祈っております。

テニスの練習に汗を流す竹内さん。

杉本さん詩画展に作品参加

杉本一男さん（執行委員）は、七月二〜七日井筒屋ギャラリーで開催された〝ありあけ詩画展〟（別項写真がそれ）に、詩作品「海辺にて」を出展した。

詩画展は毎年開催され、今年は二十二人の画家と、杉本さんをはじめとする同じ二十二人の詩人が仲よく作品をつらねた。

次が、杉本さんの作品。

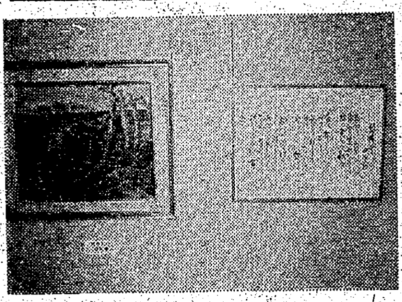
×

料理屋の店先に
廃船の置物があり
海のコマーシャルを
伝える

舟を捨てたもの
すてさせたもの
饒舌のいとまもなく
巡視船がかけめぐり
みつけしだい
燃やす

風情がないと嘆くな
それでも悔があり
発電所もコンビナートも
たしかに存在し
波の音を聞く

苦がさ



短歌　ふようの季節

二十分会（三川）　町　佳郎

汝が逝きて初命日の過ぎゆけど話題もやがてうすれゆきたり（吉田哲郎氏）
長く逢わぬ友思う夜その子らのわれの来る日を待ちいるならん
日曜ごとプールに通うふたり娘（ご）の肌黒くなれるをからから妻の
細りゆく組織はいかに役選の訪い来し候補者に言（こと）問いかけぬ
こく暑とう記事を読みつついまだ冷えぬ身に扇風機の速度はやむる
庭隈に根をおろししかふよう花真陽あびて今年も燃ゆるごと咲く
サイレンの鳴りはじむれば妻子（めこ）ら呼びいいふくめつつ木陰に黙禱すわれは（広島原爆）
核廃絶訴うるさ中あざくるごと中性子爆弾製造の報
午前中の作業終えきて憩い場に汗まみれの上衣を洗いつつおり
ポートピア行きの数日（すじつ）に迫ればみたり子の日にいくたびも話題となしぬ
蓮の花咲けるやと問いし友のためひらい来て広き蓮田見さくる
うだるごとき暑さの余韻残る夕べ雷伴いてはげしき雨降り出でぬ

姿見

四十の手習い雑感

小浜北　一主婦

四十の手習いとは良く言ったもので、このトシになって初めて、学び、覚える事の難かしさを思い知らされている。

毎週一回開かれる、中国語講座に出席するようになって三カ月がたった。頭の体操にでもなればと思って、気楽な気持で参加したのだが、どうしてどうして、そんな安易なものでない事を、身にしみて感じている昨今である。

発音にしてもしかりで、一声・二声・三声・四声とあり、漢字が日本語に似ているのでやさしいかと思いきや、これがまたぜんぜん当てはずれで、外国語的発音である。（もちろん、中国も外国であるが）英語よりも、かえって難かしいのではなかろうか、と思ったりする。

そんな、悲観的にばかり思ってもはじまらないので、せめて出席率で勝負だとばかり無欠席でがんばっているのだが、講座から帰っておさらいをしてみると、何の事はない、今習った事が半分以上も頭の中から消え失せてしまっているのには、自分ながら恐れ入る。

まわりを見まわすと、出席者のほとんどは若い人達ばかり。だから少々面映い時もある。がそこはトシの功と心臓で、先生の質問にもしゃあしゃあと対応している。

そんなこんなで、自分の頭のお粗末さにあきれながらも、一つの事をやり通す為の努力が喜びにつながる大切な時間を、大切にしたいと思ったりもする。

ともあれ、遠い将来のいつの日か、中国のあの万里の長城の上に立って、「你好（ニィハオ）。再見（ザイチエン）」と言える日を夢見て、また今週も「ニイハオ」と出かけるとしよう。

×

主婦の皆さん、姿見欄にもっと手記を寄せてください。右の一文は、わざわざ編集部までもってきてくださったものです。お名前も告げずにその人は立ち去っていきましたが、ほんとにうれしいことです。

――編集部